姫路朝祷会奨励

姫路あけぼの教会 廣田守男

「聖霊を受けよ」

ヨハネの福音書 20 章 19～23 節

皆様おはようございます。本日、姫路朝祷会を2ヶ月ぶりに再開することが出来ました。しかも2020年度に入り、新しいスタートを切った最初の朝祷会で、皆様とお会いすることが出来、嬉しく思います。皆さんも、新型コロナウイルス感染拡大防止を願って緊急事態宣言が発令されたため、教会の礼拝のみならず、朝祷会も4月、5月とそれぞれ休み、或いは縮小した故に、それぞれ家庭で礼拝の時を待ち、また祈りの時を大切に、過ごされたことでしょうか。しかし、このように一つ所に集まって礼拝を献げ、また賛美を歌い、み言葉に聞き、共に祈ることの出来る幸いを新たにかみしめておられるのではないのでしょうか。

さて今朝、朗読して頂きましたヨハネによる福音書20章19～23節から復活の主イエス様が弟子たちに顕現して下さった出来事により神様の恵みを分かち合いたいと思います。

今年の復活祭は4月12日(日)でした。復活されたイエス様は40日間弟子たちや多くの人々にご自身を現わされ、500人の見つめる前で昇天された後、5月31日(日)には約束された聖霊が降りました。それぞれの教会で、大切な礼拝を守られたこととお察しします。今日の聖書の箇所には復活のイエス様の顕現とペンテコステの恵みが明示されています。

先ず、復活日の夕べに起こった出来事を見ましょう。主イエスは復活した日の夕べに弟子たちに顕れ三度「シャローム（あなたがたに平和があるように）」と挨拶されました(19, 21, 26, マタイ 10:12)。「神に逆らう者(悪者ども)には平和(平安)がない」のです(イザヤ 48:22)。しかし「彼が刺し貫かれたのは、わたしたちの背き(罪)のためであり、彼が打ち砕かれたのは、わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによってわたしたちに平和を与えられ、彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた」(同 53:5)のです。

一度目は、弟子達がユダヤ人を恐れて家の戸に鍵をかけ、閉じ籠っていた時でした。その原因には外的要因として、イエス様と同じように自分たちもユダヤ人に捕らえられ、訴えられはしないかとの恐れと不安からでした。皆さんも新型コロナウイルスの感染を恐れて不安の故に閉じ籠もることが多かったのではないのでしょうか。

更に、内的要因として、「どんな事があってもあなたに従います」と言った舌の根

も乾かないうちに、主イエスが捕らえられた時、逃げてしまい、裏切ってしまった事への良心の呵責もあったからではないでしょうか。私たちにも良心の呵責を覚えるとき閉じこもってしまいがちです。

しかし、イエス・キリストはそのような弟子たちに手と脇の傷跡を示し、「安かれ（平和があるように）」と語りかけ、弟子達を咎めだてをしないで赦し、受け入れられたのです。弟子達の喜びと安心感は如何ばかりだったでしょうか。

二度目の場合は、失敗した弟子たちを再任命し「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす」と語り、彼らに息を吹きかけて「聖霊を受けなさい」と語られたのです。そして「互いに愛し合い、赦し合う」事を求められたのです。「聖霊の実は愛である」とある通りです。この箇所はヨハネによる福音書のペンテコステと言われています。

創世記2章に、人は神様によって「土の塵で形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられ、人は生きる者となった」と記されています。人は霊的存在として神様の交わりの対象として創造されたにも関わらず、神様に背き、罪を犯した故に、エデンの園を追われたばかりか、神様との霊の交わりが断たれてしまったのです。その状態が、エゼキエル書37章の「枯れた骨の集団」の中に明らかにされています。「枯れた骨の集団に神の言葉が語られると骨と骨が重なり、骨の上に筋と肉が生じ、皮膚が覆い」、更に「霊よ、四方から吹きつけよ」と預言すると、彼らに「霊が入り、彼らは生き返って自分の足で立った」あります。

これはエルサレムが破壊され、バビロン捕囚となり、希望を失ってしまったイスラエルの民に対する回復の預言でした。エペソ人への手紙2章1-3節にある「生ける屍」の状態からの救いを表わしております。

私たちもコロナウイルス感染の故に集まりが出来なくなり、いつ収束するかもわからない状況で見通しが立たなくなり、恐れと不安を抱いている一人ひとりにも主イエス様ご自分のみ傷を示して「平和があるように」と呼びかけ、「聖霊を受けなさい」と語っておられるのです。

使徒言行録2章には「聖霊降臨」の出来事が記されています。キリスト教会がこの地上に誕生した記念すべき日として5月31日にペンテコステ礼拝を守りました。1節にこの聖霊降臨の出来事は「一同が一つになって集まっている」時に起こったのです。約120名の人たちが烏合の衆として集まったのではなく、真剣な集まり、罪を悔い改めては祈り、約束された聖霊を待ち望んで祈り続けたのです。

特に弟子達はイエス・キリストと最後の晩餐の席上にて「誰が一番偉いか」と勢力争いをしたり、「私を裏切ろうとしている者がこの中にいる」とイエス・キリストが言われた時「まさか私ではないでしょうね」と言って自分のことしか考えられず、

現実に起ころうとしている事態に理解出来ず、その後イエス・キリストがゲツセマ

ネの園で祈っておられた時にも眠りこけ、捕らえられた時にも逃げ出してしまう事態でした。更に、復活された後にも信じる事が出来ずにいる弟子達に対して主イエスはご自身を顕し、「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、わたしの証人となる」と約束して下さったのです。ですから彼らは主の愛に捕らえられ、真剣に祈りだしたのです。

特に、イエス・キリストの兄弟達はイエス様の生前中にはその働きが理解出来なばかりか、足を引っ張ることしかしなかったのですが、復活後に回心し、母マリヤと共にこの祈りの群れに加わって真剣に祈っているのが印象的です。その時ペテロは立ち上がって弟子のひとりであるイスカリオテのユダの欠けを補うことを示され一つの提案をしています。ここに悔い改めて新しい出発をしようとしている姿を見出します。このように一同が砕かれ、祈っている時に聖霊の注ぎが起こったのです。

聖霊に満たされ、新しくされたペテロを始め弟子たちが立ち上がって大胆に御言を語り、その説教を聞いた人々の心が刺されて悔い改め、3千人の人々が洗礼を受け、キリスト教会がこの地上に誕生したのです。そこで信徒たちは交わりをし、パンを裂き、御言を聞き、祈りを共にしたのです。私たちもその聖霊のみ業に与り、今日まで導かれていることを感謝しましょう。「わたしは、わたしの霊をすべての人に注ぐ。あなたがたの息子や娘は預言し、老人は夢を見、若い男は幻を見る。その日、わたしは、しもべにも、はしためにも、わたしの霊を注ぐ」（ヨエル書2章28,29節）。

丁度百年前（1919年、大正8年頃）、東京や信州や各地で聖霊の顕著な働きが起こされ、リバイバル（信仰復興の働き）が起こりました。特に、秋山由五郎師（日本伝道隊）、柘植不知人師（活水の群れ）、小原十三司師（ホーリネス）が各地の聖会のために祈るように迫られ、信州の宿屋に集まり、祈られたそうです。その祈りは、真剣な悔い改めから始まり、主イエスを仰ぎ、信仰による勝利が与えられ、神様がお答え下さってリバイバルが起こされたとのことでした。

私たちも同じように「平和があるように」と臨み、「聖霊を受けなさい」と語りかけて下さる主イエス様に信頼し、心新たにされ、神様の御業のために心を合わせて祈るものでありたい。